

コンスタンティノープルの陥落

塩野七生

コンスタンティノープルの陥落

新潮社版

清水 一行
し みず かず ゆき

1931年 東京に生まれる

1948年 早稲田大学中退

産別会議オルグとして労働運動に入る

その後、東洋経済、週刊現代で文筆に従事

現住所 東京都練馬区豊玉中 1-1087

小説 兜町*

定価 270 円

1966年 3月 24日 第1版発行

1966年 4月 15日 第25刷発行

著 者 © 清水 一行
1966 年

発 行 者 竹 村 一

印 刷 所 同興印刷株式会社

製 本 所 有限会社 桂川製本所

発 行 所 株式会社 三一書房

東京都千代田区神田駿河台 2-9

電 話 東 京 (291) 3131-5 番

振 替 東 京 84160 番

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

三一新書 520

コンスタンティノープルの陥落*目次

第一章 二人の主人公 7

コンスタンティノープルの都 7

スルタン・マホメッド二世 14

第二章 現場証人たち 24

第三章 人みな、コンスタンティノープルへ 63

第四章 攻防はじまる 104

第五章 海戦の勝利 121

第六章 金角湾喪失 131

第七章 最後の努力 143

第八章 崩れゆく人々 164

第九章 コンスタンティノープル最後の日 174

第十章 エピローグ 190

コンスタンティノープルの陥落

第一章 二人の主人公

コンスタンティノープルの都

一都市の陥落が一国家の滅亡につながる例は、歴史上、さほど珍しいことではない。だが、一都市の陥落が、長い歳月にわたって周辺の世界に影響を与えつづけてきた一文明の終焉^{しゆうえん}につながる例となると、人類の長い歴史のうえでも、幾例を数えることができるであろうか。そして、それがしかも、年がはつきりしているだけでなく、何月何日と、いや時刻さえもはつきり示すことができるとしたら……。コンスタンティノープルは、滅亡の日が明らかであるだけでなく、誕生の日もはつきりしていることでも、珍しい都なのであった。

西暦三三〇年の五月十一日をもって、それ以前はビザンチウムと呼ばれていた、ボスフォロス海峡にそうこの都は、創立者コンスタンティヌス大帝の名をとって、コンスタンティヌスの都という意味の、

「コンスタンティノポリス」

と呼ばれるようになったのである。これが、「東ローマ帝国」あるいは、「ビザンチン帝国」と

呼ばれもする、ギリシア語を話すローマ帝国の 一千一百二十三年間にわたった首都になる。

ここでは、日本では最も普及した呼び名であるという理由で、英語式発音のコンスタンティノールで通すことにするが、この都が健在であった一千年余りもの間も、コンスタンティノポリスというギリシア、ラテンの名称だけで通用していたのではない。この都となんらかの関係を持った民族は、それぞれ自国語式に発音していたのである。例えばこの都の晩年には緊密な関係にあったイタリアは、イタリア語式にコンスタンティノポリと呼んでいたし、現代では公式の都市名となっている「イスタンブル」も、コンスタンティノポリスのトルコ語式の呼び方が、長い歳月を経た結果、原語を想像するのが不可能なほどに変化した呼称にすぎない。

アドリアノポリスが現代トルコ語では「エディルネ」となっているのと同じである。しかし、もともとはハドリアヌス帝の都という意味のアドリアノポリスも、この文中では、すでに百年も昔からトルコの首都であるという理由で、このギリシア、ラテン式の呼び名を使うわけにはいかない。かといって、当時ではトルコ人さえもまだこのように呼んでいないので、史料では最も多く使われている呼び名である、イタリア式発音「アドリアーノポリ」で統一するしかなかった。

西のローマが衰退しつづただけに、「新ローマ」とも呼ばれたコンスタンティノール^{かなめ}の急速な発展は、当時の人々の注目を集めるに充分であつたろう。ヨーロッパとアジアの要に位置するこの都は、誕生の時からすでに、地中海世界の首都となるようさだめられてもいたからである。

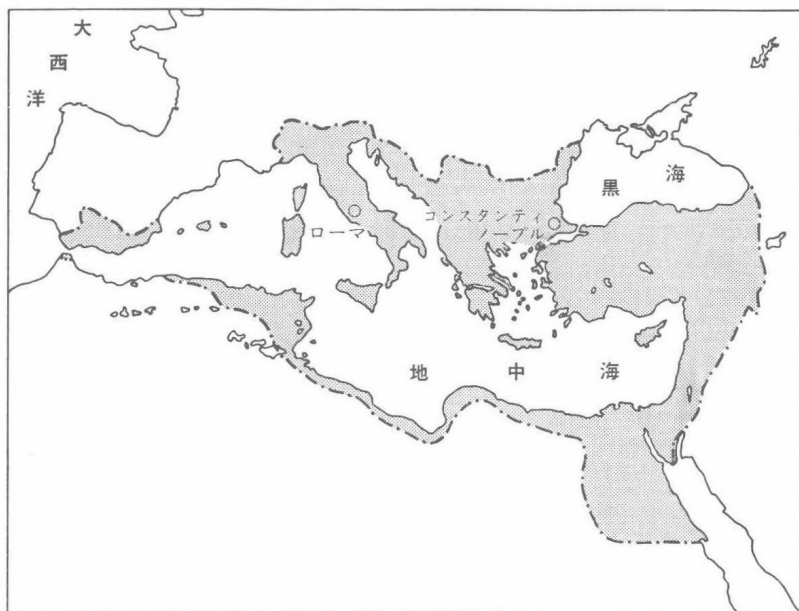
しかし、この「新ローマ」は、西のローマと、ある一点で完全にちがっていた。東のローマは、

はじめから、キリスト教を主要な要素とする帝国として生れたことである。東ローマ帝国の皇帝が公式の場でまとう大マントの色は、紫でなく紅くれないであった。古代ローマ帝国皇帝の色であった紫を、キリスト教会は、死の色、つまり、喪の色にしてしまったからだった。

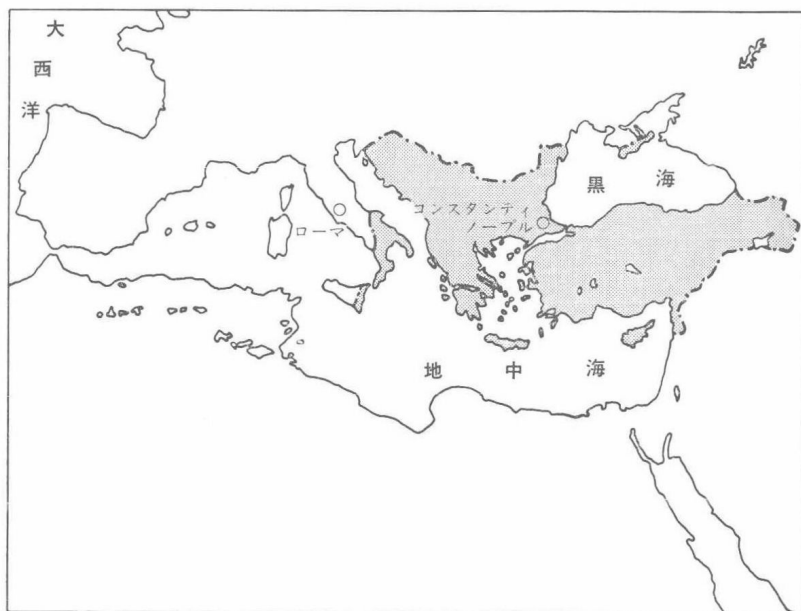
西暦四世紀の創立の頃からすでに、東のローマは西のローマよりも活気があったと言われるが、地中海世界の首都としての地位を確立したのは、やはり、本家のほうのローマが滅亡した、五世紀末からであつたろう。そして、それから一世紀も経ない六世紀半ば、東ローマ帝国の勢力圏は最大に達したのである。全盛期の古代ローマには及ばなかったにしても、ユスティニアヌス帝の時代、ビザンチン帝国の領土は、西はジブラルタル海峡から東はペルシアとの境まで、北はイタリアのアルプスから南はナイルの上流まで広がっていたのである。(図1参照)

だが、十字軍のはじまる十一世紀ともなると、勢力圏はおおはばに縮小されてくる。西欧のキリスト教勢力とオリエントの回教勢がぶつかったこの時代、教理問題でカトリックと分離したギリシア正教の本拠となっていたビザンチン帝国は、この両新興勢力の間で、旗色の判然としない中間の国になっていた。東地中海の制海権が、ビザンチン人の手から、海洋都市国家のジェノヴァやヴェネツィアの手に移ったのもこの時代である。(図2参照)そして、このままの状態で、一時期にしろ帝国が消滅した、一二〇四年の第四次十字軍による、ラテン帝国創建につながっていく。この時期に東ローマ帝国の血筋を伝えつづけたのは、コンスタンティノープルから亡命した人々によつてつくられた、小アジアの一部を占めるニケーア帝国だけであつた。

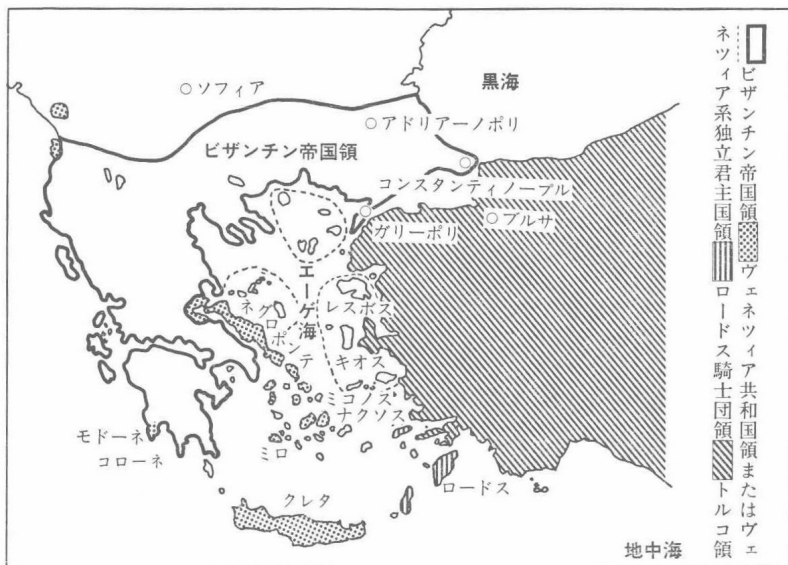
しかし、わずか六十年で「ラテン人」を追いつ出し、コンスタンティノープルに復帰したビザンチン人だったが、不幸にしてこの時代、東方には大敵が成長しつつあったのである。アナトリア



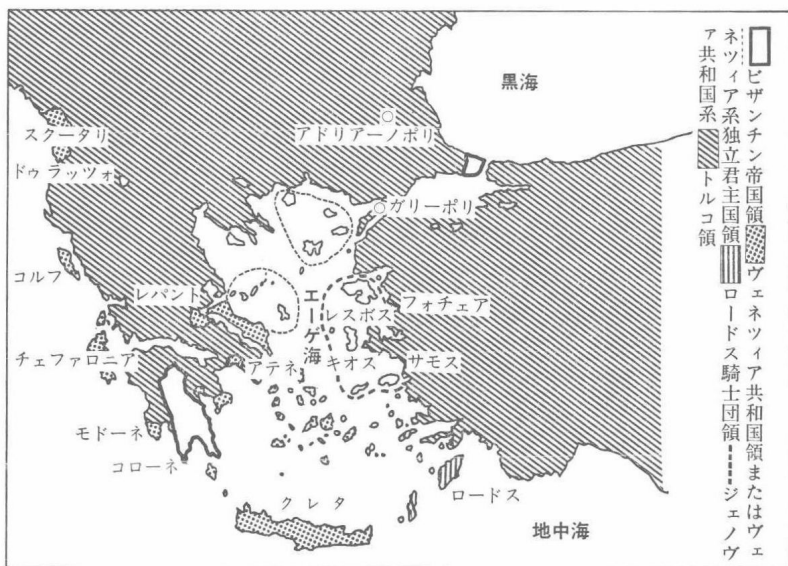
〔図1〕 565年頃のユスティニアヌス帝時代のビザンチン帝国



〔図2〕 11世紀・十字軍当時のビザンチン帝国



〔図3〕東地中海世界・1340年当時の勢力分布図



〔図4〕東地中海世界・1402年当時の勢力分布図

の地で力を貯えていた、オスマン・トルコ民族がそれだった。その後の一世紀の、ビザンチン帝国の後退に次ぐ後退は、いかに盛者必衰は歴史の理^{ことわり}とはいえ印象的である。(図3・4参照)

トルコは、ボスフォロス海峡を渡りヨーロッパの地を次々と征服していった結果、栄光をほしいまにしていたかつての大帝国の領土は、首都コンスタンティノープルの周辺を除けばあとはペロポネソス半島の一部を残すだけになってしまう。南にあるエーゲ海は、ヴェネツィアとジェノヴァという、たかだか二十万にも満たない人口しか持たない、イタリアの海洋国家ににぎられていた。

六世紀から十世紀にかけてのビザンチン帝国の全盛時代、コンスタンティノープルの人口は郊外もふくめて、百万と言われたものである。それが、十五世紀初めになると、十万あるかどうかと言われるほどに減少する。都市部の人口密度からすれば、ヴェネツィアやジェノヴァのほうが高いくらいだった。そして、冷静で合理的な思考法をわがものとすることによって、ルネサンス文明の創造者となった当時のイタリア人から見れば、十五世紀のビザンチン人は、精神上の問題である宗教と、地上の問題である政治を分離しようとしないうちに、中世的な非合理主義者の集まりであり、宗教談議にばかり熱中し、共同体を効率良く運営するに必要不可欠な積極性と協調の精神にまったく欠け、しかも迷信に動かされやすい、一言で言えばまことにだらしない民族としか映らなかったのである。

この、領土的にはトルコに囲まれ、軍事的には無も同然、経済的には西欧の商人国家に支配されていた十五世紀のビザンチン帝国をひきいる皇帝が、偶然にも、創立者と同じ名のコンスタンティヌス十一世であった。東ローマ帝国最後の皇帝となるこの皇帝は、しかし、滅びゆく優雅な

文明を体现するかのよう、名誉を尊びながらもおだやかな性質の、四十九歳の洗練された紳士であつた。二回の結婚も、いずれも妃に先立たれている。子はなかつた。

このコンスタンティヌス皇帝に、古代ギリシアとローマの文明から影響を受けながらもそれらとはちがひ、またオリエントの影響からそれを充分に吸収しながらも独自性を保ちつづけた、ビザンチン文明の象徴、コンスタンティノープルを守る使命が課せられたのである。相手は、二十歳を越えたばかりの、一人のトルコの若者であつた。

スルタン・マホメッド二世

西暦一三〇〇年の前後、小アジアの内陸部アナトリアの地に力を結集しはじめていたオスマン・トルコ民族に、当時、注目した人は一人もいなかったにちがいない。だが、それからわずか二十八年の後に、彼らは、マルモラ海に近いブルサの町を征服する。西に拡張の進路をとつたのは、東のモンゴル帝国は手強く、西のビザンチン帝国はその当時すでに弱体であつたので、アナトリアの遊牧の民にしてみれば自然な選択であつた。トルコ人は、このブルサを首都に決める。これで小アジアは、トルコ一色に染まつたようなものだった。

しかし、彼らはこれだけで満足しなかつた。トルコ民族の西進はその後もつづき、一三五四年には、ガリーポリを占領する。ダーダネルス海峡にそう港町ガリーポリは、もはやアジアではない。端しにあるとはいえ、立派にヨーロッパに属した。ガリーポリ陥落は、この町が、エーゲ海からダーダネルス海峡を通つてマルモラ海に抜け、そのまま北上してコンスタンティノープルに通ずる要地を占めるだけに、奪い取られた側のビザンチン帝国だけでなく、そこを通つてコンスタンティノープルや黒海沿岸の諸都市との交易で繁栄していた西欧の海洋国家までも、刺激せずにはすまなかつた。当時では最も完備していた情報網を誇っていたヴェネツィア共和国の、新興国トルコの脅威を報じた第一報は、この年に発せられている。